

聴き合う関係づくりをめざす

1 めざすところ

聴き合う関係づくり / 主体的・対話的で深い学び

2 聴き合う関係ができたときの子もたちの姿 (2018年度の実践から)

- 子ども同士でトラブルがあると、これまでは「注意して欲しい」と訴えに来ていたが、最近は「話し合いをしたいので、時間をください。」とか、「話し合いをしたいので、先生も中に入ってください。」と言いに来るようになった。
- 班での話し合いでは、自分の答えや考えが相手と違うとき、これまでは相手の意見を否定することから始まったが、最近は相手がなぜそう思うのかを聞くことから始まっている。また、「そういう考えもあるか」という意識で、相手の意見を聞いている。
- 班でも、分からないことを中心にして話し合いを進められるようになり、困っている子に向かって、相手が分かるように意識して話をするようになってきた。
- 外部指導者に対しても、臆することなく、分からないことを質問する場面を何回か見た。分からなければ聞くということに抵抗感がなくなった。
- 教師からの学習課題や問題、発問に対して、分からないと、自然に隣やまわりの子に聞きながら解こうとするようになった。
- ペアや班を活用してきた。よく話し合うようになった。授業中、分からなくなってしまうと固まってしまう、学習に参加できない子がいたが、そういった子が減ってきた。自分から聞こうとしたり、友だちからの助けを待とうとしたりする姿が変わってきた。

3 聴き合う関係ができることの効果 (2018年度の子どもの姿からまとめると)

- 相手を尊重するようになる。 / ○自分が尊重されることを実感する。
- 自尊感情や自己有用感が高まる。 / ○主体的に動くようになる。

4 実践方法

(1) 教室における机の配置 : コの字型にする

- 友だちの意見を聴く。友だちに発言する。先生に言うのではない。
- 職員会議で机をコの字型にするのと同じ理由。
- コの字型では、まん中が空く。教師がどの子にもすぐに近づけることができる。教師の通路である。

(2) 斑の編成 : 4人斑 男女市松模様に配置

- 自分とは異なる人から学ぶことは多い。自分と異なる人から学べば、考えが深まり広がる。
- 自分とは異なる身近な存在は、異性である。
- クラスの人数が4で割りきれないときは、3人編成の斑を作る。5人斑ではない。先日、視察に行った京都教育大学附属桃山小学校では、4人ではお客さんになる子が出るということから、斑は3人編成であった。

(3) 授業では

① 学習課題や主発問に取り組むとき

- 班の形になって考える。班で考えるのではない。考えるのは個人である。個人で考えて、分からない時は必ず班の子に「ねえ、これどうするの?」と聞く。聞かれた子は必ずそれに^{こた}応じる(応える)。

② 学級全体に向かって、学習課題や主発問に対する答えを求めるとき、

○授業における学習課題や主発問に対して、学級全体に答えを聞くときは、分からないことからスタートする。

「分かった人は手を上げて。」とは言わない。「分からない人はいますか？」とも聞かない。

「困っている人はいませんか？」「迷っている人はいませんか？」と聞く。

※「分からない人？」と聞いても手をあげないことは多い。「困っている人？」と聞くと手を上げることが多くなる。聞き方・言い方によって、子どもの反応が変わることはよくある。

○どこで困っているのか(迷っているのか)を明確にして、その子の困りごとを学級全体で解決しながら、学習課題や主発問の解決に向かう。

○一人の子どもがつまづいているところは、誰にとってもつまづきやすいところである。一人の子どもが間違えたところは、誰にとっても間違いやすいところである。どこで困っているのかを、その子から聴くことで学習に深まりができる。

○子どもは、その子ができるように一生懸命に説明をすることになる。説明することの必要性をもって説明をする。

○分からないという人に分かるように説明することは難しいことである。十分に理解できていないと、説明はできない。また、分かりやすく説明するには、説明の順序立てが必要である。応える側になった子はすいぶんと鍛えられる。理解が深まり、説明量やコミュニケーション力が培われる。

○相手が分かったと言ったときには、分かってもらえたという喜びを感じることができる。自己有用感や自尊感情を育む。

※ 課題が感想や意見を書くといった場合の全体交流

○班内で全員が感想や意見を述べあう。

○全体にぜひ広めたい感想や意見があるという人・班に発表させる。

③ 全体交流での教師の言葉

○子どもの発言に対して、つなぐ言葉だけを言う。原則、次のような4種類とする。

深める場合は、「関連してどうですか。」「意見をつないで。」 広げる場合は、「他はどうですか。」

発言者の声小さかったときは、「今の意見は聞こえましたか。」

発言内容が分からないときは、「先生は今の意見が良く分からなかったもので、誰か言い換えて。」

5 学習課題

① 教科書程度の課題

○教科書の問題と同程度の問題を使う。教科書と同じ問題にしない。課題の解き方が分からなければ、自分で教科書から解き方を学ばば良い。教科書と同じ問題にすると、教科書に解き方がのっているので、分かった気持ちになる。

○教科書程度の問題を数多く取り組ませる。

例えば、教科書程度の問題を黒板に3問書き、取り組ませる。早くできた人は教科書の問題に取り組ませる。更にできた人のためにプリントを用意しておく。答え合わせは、黒板の問題については解き方を含めて丁寧にする。教科書の問題やプリントは答えだけを言う。これにより、早くできた人が退屈することはない。(子どもを退屈にさせない。)力もつく。

○解き方の説明を文で書かせる。

○問題を子どもに作らせる。

② 子どもが夢中になって取り組む課題

○既習内容を使った難しい問題

○答えが複数あるもの (例:5つ以上書きなさい)

○解き方が複数あるもの

簡単な解き方を2つ以上知っている、自分の答えが正しいか確かめることができる。